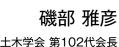
あらゆる境界をひらき、 持続可能な社会の礎を築く





うど50年前の1964年の東京 ありました。特に、今からちょ る混乱から抜けだし高度成長 を遂げた日本とともに、土木が その後、第二次世界大戦によ

求められています。

言い換えれば、持続可能な社

成し遂げ、近代日本の発展を支 ともに、1923 (大正12) 年 て大河津分水事業や丹那トンネ 時代には、日本人技術者によっ た。近代土木技術は、明治時代 えました。 の関東大震災からの復興事業を ル掘削などの大工事を進めると を中心に幕を開けました。大正 よって治水、砂防、港湾、鉄道 に御雇外国人技術者の指導に の近代土木の自立期でありまし とになりました。 学会誌記念特集号を発行するこ 1914 (大正3) 年はわが国 土木学会が創立され

学術・技術の進歩に寄与し、社

土木学会は土木技術者が集い

会に貢献してきました。

災システムを構築することが絶 年の東日本大震災などを受け ネルギーや資源問題への貢献も 球環境問題などが社会的問題と て、災害を最小化するための防 があります。同時に、2011 して認識されるようになり、エ 対に必要であります。また、地 社会基盤の整備を実現する必要 そして現在も、まだ不十分な

オリンピックを目標に、東海道 新幹線、羽田空港からの首都高

月24日に土木学会は創

立100周年を迎え、

する土木の貢献は土木界の誇り 設が整い始めました。 速道路や東京モノレールが開業 し、先進国としての社会基盤施 現在に至るまでの、社会に対



ればなりません。

せられた最重要な長期目標と

会の礎を築くことが土木界に課

なっているのです。それには、

す。その多くが市民など土木学 さまざまな行事を行っていま を記念し、各支部を始めとして 土木学会は、創立100周年

ます。

なるようにしたいと思っており

念号の内容がより明るいものと

他分野の専門家の参加も必要と 設時から土木学会は周辺分野・ な目標は達成できません。 かなければ、目指している大き 土木の周辺のあらゆる境界を開 し、歓迎し、迎え入れています。 土木工学は総合工学です。創

にも発信し、これからの土木を ひこれを共有し、非会員の方々 まっています。会員の方々とぜ り、これまでとこれからの土木 周年記念行事の内容はもとよ 考えたいと思います。そして に関するさまざまな視点が詰 総合化するよい機会なのです。 100年後の創立200周年記 この記念特集号には、100

びととの交流の場を与え、土木 ものです。つまり、100周年 です。100周年は、人びとを 標に向けての歩みを進めるもの に対する理解を深めながら、目 100周年は土木学会内外の人 は土木学会内外の人びとと土 会外の人びととの連携による を深めるよい機会となります。 木について学び、議論し、理解

環型社会を築くこと、活力ある

経済を支えること、そして、地

尊重しながら環境を保全し循

安全な社会を築くこと、自然を

証することが重要です。土木学

会はこの目標を目指して、次の

100年での活動を開始しなけ

域の個性が発揮された生活を保